

2015年 3月 4日

公益財団法人 笹川記念保健協力財団  
理事長 喜多 悦子 殿

所属機関・職名

盛岡赤十字病院 スタッフース

研修者氏名 高屋敷麻理子 印 

2014年度日本財団ホスピスナースネットワーク会員に対する海外研修助成  
研 修 報 告 書 の 提 出 に つ い て

標記について、下記のとおり報告いたします。

#### 記

1. 研修期間 2015年 4月30日 ～ 5月 3日（4日間）
2. 参加学会名 Asia Pacific Hospice Palliative Care Network 2015 Taipei
3. 研修報告書（注 研修報告書はA4判横書き）

I 本研修の成果：学んだこと、今後役立つと思う点について

II 今後の課題等

III 本研修助成についての改善点及び当財団へ対するご意見ご要望など

## アジア・太平洋ホスピス・緩和ケアネットワーク第 11 回台北カンファレンス研修参加報告書

|     |                                             |     |              |
|-----|---------------------------------------------|-----|--------------|
| 所属先 | 秋田赤十字病院                                     |     |              |
| 氏名  | 高屋敷 麻理子                                     |     |              |
| 期 間 | 2015. 04. 30－5. 3                           | 場 所 | 中華民国（台湾） 台北市 |
| 目 的 | 第 11 回アジア・太平洋ホスピスカンファレンス（APHC）に参加しポスター発表を行う |     |              |

I 本研修の成果：学んだこと、今後役立つと思う点について

1. APHCでは、台湾・オーストラリア・韓国・アメリカのホスピスケアの状況を聞くことが出来た。どの国の方々も、患者の身体面、精神面・霊的苦痛・社会面など、シシリー・ソンドースの全人的苦痛の視点で患者や家族を捉え、寄り添う・支える支援の必要性を述べていた。
2. 意思決定支援・小児の緩和ケアの必要性・緩和ケアの看護教育について発表されており、緩和ケアにおける看護師の役割・DNARや患者の意思決定支援の難しさなどを話していた。（終末期ケア、緩和ケア看護、文化と霊性、症状対策、教育訓練、研究、リーダーシップ、ボランティア、小児、倫理）講演をされた先生は、優雅で穏やかな口調で講演をされており、スライドも動画や写真を盛り込み、発表の内容をイメージできるように工夫をされていた。発表をする時の姿勢、スライドの書き方、表現方法を学ぶことが出来た。ポスター発表も色の配色が綺麗で見やすいポスターが多かった。
3. 台湾で行われたAPHCに参加しなければ、海外の学会は自分には無縁だと思っていた。APHCに参加したことで、自分の緩和ケアの実践報告など、日本で行っている緩和ケアの活動について、アジアや世界に発信し、海外で緩和ケア活動をしている方々と、交流や情報交換を行うことも必要であることを学んだ。もっと海外に目を向け、自分自身の看護の視野を広げ、よりよい患者・家族ケア、看護教育が出来るように努力をしていきたいと考える。

II 今後の課題等

1. 看護師も英語を話せるようになることが必要であることを実感した。海外の学会参加をすることで先進医療や看護教育を学べる機会があっても、英語が解らなければ学べることは少ない。海外の方々とのコミュニケーションをとり、情報交換をするチャンスがあっても英語が不自由であれば活かすことが出来ない。自分の英語力を高めること、看護師の方々にも英語を勉強する必要性を伝えていきたいと考える。
2. アジアの緩和ケアの状況・患者・家族支援・緩和ケア教育について講演を聞き、日本の患者・家族支援、緩和ケア教育も決して劣っていないことが解った。普段行っている緩和ケアの臨床実践、成果を日本からも発表し、海外の緩和ケア活動をしている方々と、積極的に情報交換やディスカッションが出来るように努力をしたいと考える。
3. 日本に住む伯母が、がんで治療をしていたため、看病のため何度も来日していたという台湾の方のお話を聞く機会があった。日本の病院では、英語が通じず、治療の内容の疑問や不安が伝わらずに困ったこと、家族も不安であったが、英語が通じず円滑なコミュニケーションが出来なかったとのことであった。日本にも外国人が、がん治療を受けに来るようになっているが、外国人が安心して治療やケアを受けられるように、英語を学び、コミュニケーションを上手にとれることが求められていることが課題である。外国人を受け入れて治療ができるように、病院では翻訳ソフトを各病棟で使用できるように準備をし、英語担当の事務の方がいつでも対応する、治療・検査の説明を伝えるための英語のファイルなどを準備して外国人に対応する工夫をしていたが、相手に寄り添い、患者・家族思いを聴く為には、英語力を看護師が身につけて、コミュニケーションをすることが必要である。

III 本研修助成についての改善点及び当財団へ対するご意見ご要望

第 11 回アジア・太平洋ホスピスカンファレンス海外研修助成をして頂いてありがとうございました。

笹川記念保健協力財団の日本財団ホスピスナースネットワーク会員への海外研修助成がなければ、海外の学会を体験することが出来ませんでした。海外の医療や看護、研究発表について、学びを深めたことで、海外の学会にも参加して学びを深めていきたいと思いました。また、日本でも外国人へのケアの質を高めていかなければいけないと思いました。今後も海外の学会参加の助成をする企画があると良いと思いました。喜多先生も同行して頂けると、海外の医療や看護についてのお話を聞けるので、喜多先生と一緒に学会に行くと学びが深まるとと思いました。